[成果情報名]ツバキ実生産性の高いツバキ林へ早期に誘導するための断幹率

[要約]萌芽枝の発生が旺盛でツバキ実生産性の高いツバキ林に早期に誘導するためには、断幹率は高い方がよい。断幹後、断幹残存木からも萌芽枝が発生し増加する。

[キーワード]ツバキ林、生産性、断幹率、相対照度、当年枝数

[担当]総合農林試験場・林業部・森林資源利用科

[連絡先]電話（代表）0957-26-3330、（直通）0957-26-4293

[区分]林業（特用林産）

[分類]指導

[背景・ねらい]

ツバキ林更新のための施業技術が確立していないため、天然林改良後放置され、樹高が高くなり林冠が混み合って着果量が減少し、生産性が低位に推移している。樹高が高くなり過ぎたツバキ林の生産性を高めるため、断幹による更新試験を実施し、好適断幹率を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

１．相対照度が高くなるに従って当年枝数が増加することから、林内を明るくすることで萌芽枝の発生が促進される（図１、表１）。

２．断幹後の残存木からも萌芽枝が発生し、萌芽枝は増加する（表２）。

３．100 %断幹区では、断幹後２年経過した時点ですでに開花した（表１）。断幹後の日射量の多寡が萌芽枝の形成だけでなく花芽分化にも影響したと考えられる。

４．相対照度 30 %以下では、早期の樹冠拡大は期待できず、断幹木が枯死する場合もある（表１）。

[成果の活用面・留意点]

・断幹率は高い方が林内が明るくなり萌芽発生には好ましいが、ツバキ実収穫量の減少を十分考慮して断幹率を決定すること。

［具体的データ］

表1　断幹木からの当年枝発生状況（1m断幹、2年経過）

区分		相対照度（%）	平均当年枝数（本）	花蕾数（個）	供試本数（本）	着花本数率（%）	備考
試験林	100%断幹区	93.7	123.6	3	24	12.5	
	25%断幹区	53.3	91.7	0	10	0.0	
	8%断幹区	13.5	11.3	0	5	0.0	うち2本枯死
参　考	ツバキ混交林	27.0	―	―	―	―	樹冠拡大せず
	〃	5.5	―	―	―	―	5本全木枯死

表2　断幹残存木の当年枝数　　単位：本

試験区	区分	経過年数 1	2	3
25%断幹区	平均値	2.37	7.73	13.53
	（最少～最多）	(0～16)	(0～40)	(0～154)
8%断幹区	平均値	0.27	4.42	―
	（最少～最多）	(0～16)	(0～30)	―

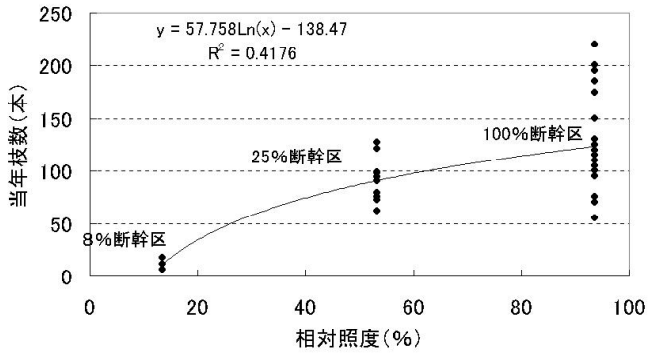

図1　相対照度と当年枝数（1m断幹、2年経過）

（断幹後６ヶ月経過）

（断幹後２年経過）

図２　断幹木の状況（100 %断幹区）

［その他］

研究課題名：五島つばきの新用途及び育成管理技術の開発

予算区分　：県単

研究期間　：2005 ～ 2007 年度

研究担当者：久林高市